

令和5年度 第75回 卒業式 校長式辞「人と共に」

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

出会いは奇跡と言われます。皆さんが、ここで出会い、共に過ごし、ここを卒業すること、それも奇跡です。そもそも、この世に生まれてきたこと、今生きていること、それこそが奇跡です。数多くの奇跡の連続で、今ここに、皆さんがいます。そして、旅立ちの日を迎えました。

ここで、奇跡的に出会った皆さんが書いた卒業文集の中から、二人の文集の一節を紹介します。

「成長したと感ずること」。自分の考えを持ち、それを人に伝えられるようになった。そして、自分のことよりも相手のことを大切にできるようになった。

「仲間がいると…」。自分と違う考えに触れたり、相談に乗ってもらえたり、意見を言い合うことが大事だと、そして、一つ一つの言葉を選んで話すことが習慣になった。

「自分の意見を言うことが苦手だった。そのために、いろいろなことを友だちが決めてしまう。全然楽しくないし、嫌な思いをすることもあった。それでも何も言えず、どんどん不安になっていった。」とても率直で共感します。いよいよ「変わりたい」という思いが強くなって、どのように努力したか、6年間の歩みを振り返っています。

この二人の文集には、いずれも、自分と相手が登場します。いや、皆さんの文集で、自分のことだけを書いているものはありませんでした。この世は一人では存在できません。必ず自分以外の誰かがいます。多くの誰かと共に生きています。

共に生きる在り方を、一言で言い表すことは難しいかもしれませんが、今日はその糸口として、「折り合いを付ける」という言葉について考えてみたいと思います。「折り合いを付ける」と聴いて、皆さんはどのような印象を持つでしょうか。「妥協」や「譲歩」「同調」といった何となく打算的なマイナスイメージがあるかも知れませんが、でもそれは、意味は近くても、そこに含まれるニュアンスは大きく異なります。

「妥協する」という言葉には、話し合いをする片方のみが折れて我慢する印象を含むような気がします。一方で、「折り合いを付ける」というのは、もっと話し合いを繰り返し、建設的にお互いが歩み寄り、それぞれが納得できる答えを導く努力が感じられます。

つまり、折り合いを付けるとは、一方的に自分の意見を通そうとするのではなく、自分だけが我慢をするのでもなく、お互いに納得をした上での合意を目指すものです。

そのためには、相手の立場に立って想像すること、全く違う角度から物事を見ることが大切です。それができれば、答えは一つだけではなく、いろいろな見方や考え方を取り入れられる視野が広がるはずです。

これから中学校生活が始まります。奇跡の出会いを大切にして、自分自身との対話、仲間や社会との対話、取り組むこととの対話を大切に、納得解を導きながら、一步一步、自分の道を歩んでください。

さて、今、皆さんの後ろに、御家族の方が大勢お見えです。12年前、皆さんは一人では、何もできなかったはずです。すべて助けが必要でした。皆さんにとっては長い12年間だったかも知れませんが、家族にとっては、あっという間の12年間だったと思います。今、皆さんの晴れの姿を見て、感慨深いものがあると思います。

保護者の皆様、御家族の皆様、お子様のご卒業、心よりお慶びを申し上げます。これまで本当にありがとうございました。4月から中学生になりますが、まだまだ子供です。一步一步自立していくと思いますが、まだまだ皆様の助けが必要です。よろしくお願い申し上げます。

結びになりますが、本日は、昭島市教育委員会生涯学習部長 磯村義人様をはじめ、多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、心よりお礼を申し上げます。今、輝かしい門出を迎える卒業生に対し、一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。私の式辞とさせていただきます。

では、卒業生の皆さん、卒業おめでとう。

今までありがとう。本当にありがとう。さようなら。お元気で。

令和6年3月25日 昭島市立富士見丘小学校長 稲垣 達也